1.エイズ動向委員会は、2ヶ月ごとに委員会を開催し、都道府県等からの報告に基づき患者発生動向を把握し公表している。今般、平成11年1年間の発生動向を取りまとめたので報告する。

2.平成 11 年の発生動向については、分析結果に詳細に述べられているが、委員会として特に注目した点は以下の通りである。

(1) HIV 感染者の報告数は、1996 年以降増加を 続け、1999 年は過去最高の報告数(530 件)と なった(図1)。HIV 感染者の増加は、日本国籍 男性の増加が中心であり、日本国籍女性も緩や かな増加傾向にある(図2)。

1999 年の HIV 感染者報告例では、日本国籍 男性が 72%を占め(図3) 推定される感染地域 も日本国籍者の 79%が国内感染であった(図4)。 感染経路は、性的接触による感染が 77%(図5) を占め、特に日本国籍男性では 84%を占めてい た。

日本国籍男性に国内での流行拡大が続いており、異性間および同性間の性感染防止に向けた 積極的な対策を進めなければならない。

(2) AIDS 患者の報告数は、発生動向調査開始以来はじめて 1998 年には減少に転じたが、1999年は再び増加した(300件、図1)。1999年のAIDS患者報告例では、日本国籍男性が71%を占め(図3)、日本国籍者における推定感染地域は69%が国内での感染例であった(図4)。感染経路は、異性間性的接触による感染が55%と多く、同性間の性的接触による感染は18%であった(図5)。

わが国における AIDS 患者は依然増加傾向 にあると思われ、今後の推移を注意深く見守る 必要がある。

(3)1999 年の報告例の内、外国国籍者の占める 割合は HIV 感染者では 20%、AIDS 患者では 25%であり(図3)、出身地域としては、東南 アジアが最も多く、ラテンアメリカがそれに次 いでいた。外国国籍者に対する対策も強化する 必要がある。

図1. HIV 感染者及び AIDS 患者報告数の年次推移

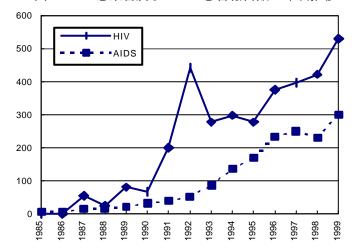


図 2. HIV 感染者報告数の国籍別、性別年次推移

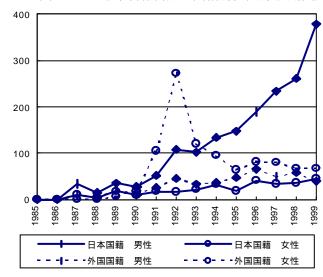
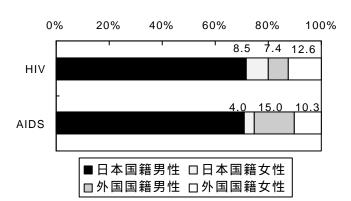


図 3. HIV 感染者及び AIDS 患者の国籍別、性別内訳 (1999年報告例)



(4)感染経路は、HIV、AIDS ともに性的接触による感染が大半であり、静脈注射薬物濫用や母子感染によるものはいずれも1%以下にとどまっている(図5)。しかし、他国の経験でも静脈注射薬物濫用による感染の拡大は極めて急速であるため、引き続き監視が必要である。

図4.HIV 感染者及び AIDS 患者の推定感染地域 (1999年報告・日本国籍例)

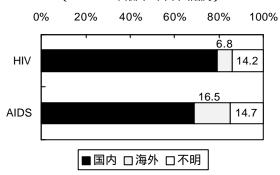
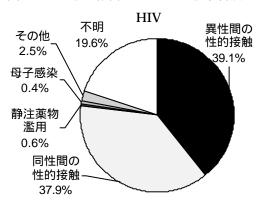
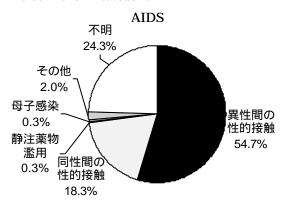


図5.1999年に報告された HIV 感染者及び AIDS 患者の感染経路別構成





(5) HIV 感染者の報告地は、東京、関東・ 甲信越ブロックが依然多く、1999 年報告 例では76%を占めている。また、近年近畿 ブロックの報告数が増加傾向にあり、九州 ブロックでも増加の兆しが見られている (図6)地域の状況に応じた機敏な対策の 展開が望まれる。

図 6. HIV 感染者報告数の報告地別年次推移

